

イエス・キリストの啓示 - 第十五

第七の封印と預言的真理の封印解除

Jeff Pippenger

2023-11-13

そして、彼が第七の封印を解いたとき、天におよそ半時間の静けさがあった。私は、神の御前に立っている七人の御使いを見た。彼らには七つのラッパが与えられた。また、別の御使いが来て祭壇のそばに立った。彼は金の香炉を持っていた。そして、多くの香が彼に与えられた。これは、彼がそれをすべての聖徒たちの祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。それから御使いは香炉を取り、祭壇の火でそれを満らし、それを地に投げつけた。すると、もろもろの声と雷鳴と稲妻と地震とが起こった。黙示録 8:1-5.

私たちは、アメリカ合衆国が第一の天から聖ならざる火を降らせることになる時代に、天の聖所からの聖なる火の注ぎ出しについて論じている。黙示録第十章で七つの雷が語ったことの啓示は、猶予期間が閉じる直前まで封印されることになっていた。第七の封印が開かれるとき、猶予期間は閉じようとしているものとしても示されている。

そして彼は私に言った。「この書の預言の言葉を封印してはならない。時が近いからである。不義を行う者はなお不義を行わせ、汚れた者はなお汚れたままでおらせ、義なる者はなお義を行わせ、聖なる者はなお聖くあらせよ。」ヨハネの黙示録 22:10、11

七人の天使が音を発する準備をしているときに、第七の封印が解かれる。

そして、七つのラッパを持っていた七人の天使は、吹き鳴らす準備をした。黙示録 8:6.

恩恵期間が閉じるとき、「だれも神殿に入ることができない」。なぜなら、人々の罪のためのキリストの執り成しが終わったからである。恩恵期間は閉じ、七人の天使に神の怒りの鉢を注ぐよう命じられる。

そして、神の栄光とその力から立ちのぼる煙で神殿は満ち、七人の天使の七つの災いが完了するまで、誰もその神殿に入ることができなかった。そして私は、神殿から出る大きな声が七人の天使にこう言うのを聞いた。「行って、神の怒りの鉢を地上に注げ。」ヨハネの黙示録15章8節、16章1節。

黙示録の9章から11章で七つのラッパを吹き鳴らす七人の天使が、最後の七つの災いを注ぐ七人の天使と異なるという示唆はどこにもない。むしろ、七つのラッパで表されるさばきの預言的特質は、16章における神の怒りの七つの鉢が及ぶ領域とその影響において並行している。さらに直接的なつながりとして、ラッパのさばきは明確に災いと呼ばれている。

また、これらの災いで殺されなかった残りの人々も、自分の手のわざを悔い改めず、悪霊や金、銀、銅、石、木の偶像を拝むのをやめなかった。これらは見ることも、聞

くことも、歩くこともできない。黙示録 9:20

第七の封印が解かれることは、猶予期間がまもなく終わろうとしているという文脈に意図的に置かれている。第七の封印は、七つの雷が「語った」事柄についての第二の証言を表しており、それはヨハネもパウロも書き記すことを禁じられたものである。

彼は獅子がほえる時のように大声で叫んだ。彼が叫ぶと、七つの雷が声を発した。七つの雷が声を発し終えたとき、私は書き記そうとしたが、天から私にこう告げる声を聞いた。「七つの雷が語った事柄を封印し、それを書き記してはならない。」黙示録 10:3、4。

七つの雷が「語った」ことは封印され、第22章では、『黙示録』の中で封印されていたその預言の封印が解かれることになっており、第七の封印の場合と同様に、それは猶予期間が閉じる直前に解かれることになっていた。

ホワイト姉妹は、七つの雷が『語った』ことを封じることは、ユダ族の獅子がダニエルに終わりの時まで自分の書を封じよと命じたときと同様に、ユダ族の獅子による同じ行為を表していると指摘している。ダニエル書と黙示録は同じ書であり、黙示録では、七つの封印が施されていた書の封印を解くとき、イエスはユダ族の獅子として表されている。ゆえに、ダニエルに終わりの時まで自分の書を封じよう命じたのも、ユダ族の獅子であった。ユダ族の獅子こそ、御言葉を封じ、また解かれるお方である。彼こそが御言葉だからである。

これらの七つの雷が声を発した後、小さな巻物に関して、ダニエルにそうであったように、ヨハネにも命令が下る-「七つの雷が語ったことを封じよ」。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971頁。

ダニエル書と黙示録の内的証拠は、第七の封印の開封が、七つの雷が語ったことの封印が解かれることに対する第二の証言であることを示している。ダニエル書の封印が解かれることと、七つの封印で封じられていた巻物の封印が解かれることの双方は、予言的メッセージの封印が解かれるときに明らかにされる真理が、その性質上、段階的であることを示している。ゆえに、ダニエル書はそれを知識が増すこととして述べ、黙示録は封印を一つずつ解いていくものとして描いている。

それは、完全な昼に至るまで、ますます明るく輝いていく光である。

しかし、正しい者の道は輝く光のようで、それは完全な日となるまでますます輝きを増す。箴言 4:18

『真理』の封印が解かれたとき、それは進歩的である。

「もし、神の古代の民にとって、憐れみと裁き、助言と戒めにおける神の彼らへの取り扱いをしばしば思い起こすことが必要であったのなら、同様に、御言葉のうちに私たちに与えられている真理を黙想することも重要である。すなわち、その真理に心を留めるなら、私たちが謙遜と服従、そして神への従順へと導くのである。私たちは真理によって聖められなければならない。神の御言葉は、各時代にふさわしい特別な真理を示している。過去における神の民への取り扱いは、私たちが注意深く心に留める

べきである。そこから私たちは、意図された教訓を学ばなければならない。しかし、そこに安住して満足してはならない。神はご自分の民を一步一步導いておられる。真理は漸進的である。熱心に求める者は、絶えず天からの光を受け続けるだろう。「真理とは何か」。この問いこそ、常に私たちの問いであるべきである。」
時のしるし、1881年5月26日。

2023年7月末に、イエス・キリストの黙示の封印が解かれ始めた。

第七の封印および七つの雷が語ったことと同様に、「イエス・キリストの黙示」は、恵みの時が閉じる直前に封印が解かれる。これは、第七の封印が解かれることと七つの雷によって表されている同じメッセージに対する第三の証しを与える。黙示録におけるこれら三つの表現は結び合わさって、「イエス・キリストの黙示」のメッセージを形作る三つの証しとなる。これら三つの証しの解き明かしは漸進的であり、その影響もまた漸進的である。

「神の律法に従うことは聖化である。魂におけるこの働きについて誤った考えを抱いている人は多いが、イエスは弟子たちが真理によって聖められるように祈り、さらに『あなたのみことばは真理です』（ヨハネ17:17）と付け加えられた。聖化は瞬間的なものではなく、従順が継続的であるのと同様に、漸進的な働きである。サタンが私たちに誘惑を仕掛け続けるかぎり、自己征服の戦いは何度でも繰り返し戦わなければならない。しかし、従順によって、真理は魂を聖める。真理に忠実な者は、キリストの功績によって、人生のさまざまに変わる境遇に左右されて形づくられてしまうような性格のあらゆる弱さに打ち勝つであろう。」信仰と行い、85。

『イエス・キリストの黙示』に対する理解の進展が、2023年7月末から順次公表され始めた。その時に公表され始めた諸真理の理解に至る過程は、2020年7月18日直後に始まった。

第七の封印の開封に関するメッセージで明らかにされている真理は、真夜中の叫びという道標を扱っている。ミラー派の歴史における真夜中の叫びは真理の漸進的な発展であり、その事実はサミュエル・スノーの働きを歴史的に検討することで示すことができる。イエスは第一天使の運動によって第三天使の運動を例示する。彼はいつも初めによって終わりを示すからである。

真夜中の叫びのメッセージを形作る諸真理とは、神がいかなる方であるか、そして神の品性が御言葉においてどのように表されているかに関する理解である。これらの真理には、最終的に真夜中の叫びのメッセージを宣べ伝える者たちが成就することになる歴史的過程についての、非常に詳細な記述が含まれている。七つの雷の隠された歴史こそが、その歴史的過程を明らかにするものである。第七の封印はその詳細な歴史的過程の一部であるが、その啓示は、真夜中の叫びのメッセージが最終的に確定する時に始まる期間に向けられており、したがって十四万四千人への封印が完了する時を示す。第七の封印が段階的に解かれていくのは、1844年夏のエクセターのキャンプ集会によって示されているように、真夜中の叫びのメッセージが完全に展開した時に始まる。これらの記事は、エクセターのキャンプ集会へあなたを招く個人的な招待状である。

第七の封印が解かれると、祭壇の火が地上に投げ込まれ、「声と雷鳴と稲妻と地震」が起こる。「声」はラツパを表す。

声を限りに叫べ、ためらうな。ラッパのようにあなたの声を上げ、わたしの民にその背きを、ヤコブの家にその罪を告げよ。イザヤ書58章1節。

ラッパの響きは、差し迫った審判を警告するメッセージであることを示す。イザヤが神の民にラッパのように声を高く上げるよう命じるとき、彼らは大声で「叫べ」と言われている。真夜中の叫びのメッセージは、日曜法の地震の時の直前に封印が解かれる。やがて来る日曜法の直前に封印が解かれるこの真夜中の叫びのメッセージは、大いなる叫びへとふくらんでいくメッセージである。イザヤが「声をあげて叫べ」と言うとき、彼は、真夜中の叫びのメッセージに加わる第二の声である第三の天使の大いなる叫びとの結合を指している。高らかに響く真夜中の叫びのメッセージは、第三のわざわいである第七のラッパの警告である。神の民は、そのラッパのメッセージが吹き鳴らされるとき、自分たちが猶予の時の最後の瞬間にいるのだと理解しなければならない。ゆえにイザヤの命令は、猶予の終わりに備えるよう促す警告であり、神の安息日を退けたことに対する、イスラムの第三のわざわいのラッパの裁きがアメリカ合衆国を打とうとしているという警告でもある。日曜法の時、黙示録18章にある二つの「声」のうち第一である真夜中の叫びは、バビロンにまだいる神のほかの子らが呼び出されるにつれて、大いなる叫びへとふくらむ。

この時のための真理、すなわち第三天使のメッセージは、私たちが大いなる最後の試練に近づくにつれて、大声で、すなわち増し加わる力をもって、宣べ伝えられるべきである。『1888年資料』710頁。

第三の天使の「大いなる叫び」が「勢いを増していく」ことは、エホバご自身がシナイで十戒を宣言されたときに型として示された。その出来事において、山が震え、煙に包まれるにつれて、ラッパの音は勢いを増していった。恐れはあまりにも大きく、モーセでさえ非常におののいた。そこで民は恐れて「声」を上げ、神の「声」がもう響かないようにと願った。

そしてラッパの音と言葉の声があり、それを聞いた者たちは、これ以上自分たちに言葉が語られないようにと懇願した。（というのも、彼らは命じられたことに耐えられなかったからである。「たとい獣であってもこの山に触れるなら、石で打ち殺されるか、矢で刺し通されなければならない」。また、その光景はあまりにも恐ろしかったので、モーセは「私は非常に恐れおののく」と言った。）ヘブル人への手紙 12:19-21

彼らが聞いたその「声」は、第三の天使の警告のメッセージの「声」を表している。恐怖と苦悶の中で、彼らは自分たちの「声」で応えた。日曜法における「声」は、油を求める愚かな乙女たちによっても表されており、賢い乙女たちの「声」は、彼女たちに自分で買いに行くように告げている。人類の猶予期間の終わりには、日曜法の時愚かなアドベントの乙女たちがそうであるように、自分たちが失われた者だと悟った人々の「声」は、岩や山が自分たちの上に倒れてくるようにと叫ぶ。日曜法は、シナイ山で律法が与えられた出来事によって型として表されている。

この厳粛なときにおける神の力の驚くべき顕現——神秘的なラッパの響きは次第に大きくなり、雷鳴はあらゆる山肌に反響し、稲妻の閃光は峻厳にして厳粛な峰々を照らし出し、そして雲と嵐と濃い暗闇のただ中、シナイの頂には焼き尽

くす火のような神の栄光が現れていた——主の御臨在のこれらのしるしに接して、イスラエルの人々の心は恐れで挫け、会衆全体は「遠く離れて立った」。モーセでさえ、「私は甚だしく恐れ、おののく」と叫んだ。そのとき、荒れ狂う自然の猛威を凌いで、主の御声が聞こえ、御自分の律法の十の戒めが語られた。

神の大いなる鏡がイスラエルの民に自らの真の状態を明らかにしたとき、彼らの魂は恐怖に圧倒された。神の言葉の恐るべき力は、震える彼らの身には到底耐えられないもののように思われた。彼らはモーセに懇願した。「あなたが私たちに語ってください。私たちは聞きます。しかし、神が私たちに語らないようにしてください。さもなければ私たちは死んでしまいます。」神の大いなる義の規範が彼らの前に示されたとき、彼らはかつてないほど、罪の忌まわしい性質と、清く聖なる神の御前における自らの罪責を悟った。時代のしるし、1881年3月3日。

祭壇の火が地に投げ入れられると、「声と雷鳴と稲妻と地震」が起こる。「雷鳴と稲妻」は神の裁きの象徴である。日曜法の時、アメリカ合衆国はその「不義の杯」を完全に満たし、「国家的背教の後には国家的破滅が続く」ことになる。「不義の杯」は第四代で満ちる。というのも、地から上ってくる獣の二本の角はいずれも、反逆を強めつつ第四代にわたって進んでいくからである。日曜法は、「雷鳴と稲妻」によって表される神の裁きが下される時を画し、その裁きは第四代に至るまで及ぶ。

アモリ人について主は言われた。「第四代に至って、彼らは再びここに戻って来る。アモリ人の罪はいまだ満ちていないからである。」この民は偶像崇拜と墮落のゆえに際立っていたが、その罪の杯はまだ満ち切っておらず、神は彼らをことごとく滅ぼすよう命じられなかった。人々が言い逃れの余地を残さないよう、神の力が顕著なかたちで現されるはずであった。憐れみ深い創造主は、第四代に至るまで彼らの罪を忍耐することをよしとされた。そのときになってもなお良い方向への変化が見られなければ、神の裁きが彼らに下ることになっていた。

「神は少しの誤りもなく、今もなお、すべての国々に対する勘定をお取りになっている。悔い改めへの招きとともにその憐れみが差し伸べられている間は、この勘定は開かれたままである。しかし、その勘定の数字が神が定められた一定の数に達すると、神の怒りの執行が始まる。勘定は締め切られる。神の忍耐は尽きる。彼らのために憐れみを嘆願することは、もはやない。」『証言』第5巻、208。

ホワイトは、日曜法から始まる裁きを「神の破壊的な裁き」と呼んでいる。彼女は、真夜中の危機に備える機会が与えられていながらそれを拒んだ、愚かなラオデキヤのアドベンチストたちにとっては、もはや手遅れであると教えている。愚かな乙女たちにとってのその破壊的な裁きの時は、まだ真理を聞いたことのない人々にとっては「憐れみの時」である。

「ああ、人々が神のご訪問の時を知っていたなら！ この時のための試金石となる真理を、まだ聞いたことのない人が多くいる。神の御霊が働きかけておられる人も多くいる。滅びをもたらす神の裁きの時は、何が真理であるかを学ぶ機会のなかった者たちにとっては、あわれみの時である。主は彼らをいつくしみ深く顧みられる。あわれみの御心は動かされ、救うためにその御手はいまだ差し伸べられている。一方で、入ろうとしなかった者たちには戸が閉ざされている。」『証言』第9巻、97頁。

第七の封印が開かれると、「声、雷鳴、稲光、そして地震」が起こる。黙示録十一章の「地震」が最初に成就した「時」はフランス革命であり、その「時」の完全な成就是、間もなく到来する日曜法における「地」の獣の「震え」である。その「時」に、第七の封印が完全に開かれる。十字架は日曜法を象徴しており、十字架のときには大きな地震があった。

イエスは、再び大声で叫び、息を引き取った。すると、見よ、神殿の垂れ幕が上から下まで二つに裂け、地は震え、岩が裂けた。マタイ 25:51。

十字架でサタンの王国が覆されたように、日曜法の時にも覆されるだろう。

キリストは、ご自身が成し遂げるために来られた御業を完成するまで、いのちをお捨てにならなかった。そして、最後の息で叫ばれた。「成し遂げられた。」ヨハネ19:30。戦いはすでに勝利に終わっていた。主の右の手と聖なる御腕が、主に勝利をもたらした。征服者として、主は永遠の高みへ御旗を打ち立てられた。天使たちの間に喜びがなかっただろうか。天のすべては救い主の勝利を喜び祝った。サタンは打ち負かされ、自分の王国が失われたことを知った。『The Desire of Ages』758ページ。

十字架のときの地震は、「アルファにしてオメガである『真理』」の象徴である。『真理』は初めであり、中ほどであり、終わりである。これは、ヘブライ文字の第1字、第13字、最後の字を組み合わせて作られた語である。キリストが死なれたときに地震が起こり、その復活のときにももう一度地震があった。十字架で最初の地震が起こり、続いて墓（埋葬）の時を経て、さらに復活のときに地震が起こった。いずれの地震でも墓が開かれた。

「イエスが十字架にかかっておられたとき、『成し遂げられた』と叫ばれたとき、岩は裂け、地は震え、いくつかの墓が開いた。彼が死と墓に対する勝利者としてよみがえられたとき、地が揺れ動き、天の栄光がその聖なる場所を照らす中で、その呼び声に従って多くの義なる死者が出て来て、彼がよみがえられたことの証人となった。恩寵にあずかってよみがえったその聖徒たちは、栄光を帯びて現れた。彼らは、創造の時からキリストの時代に至るまで、あらゆる時代から選ばれた聖なる者たちであった。こうして、ユダヤ人の指導者たちがキリストの復活の事実を隠そうとしている間に、神は、彼らの墓から一団を呼び起こして、イエスがよみがえられたことを証しさせ、またその栄光を宣べさせることを選びになった。」Early Writings, 184。

最初の地震では墓が開き、最後の地震ではキリストの墓が開かれた。黙示録11章では、地震と同じ時刻に、二人の証人が自分たちの墓から出てくる。地震とは日曜法であり、十字架によって象徴されている。ゆえに、日曜法の時に二つの復活があることになる。第一の復活は、女が産みの苦しみをする前に起こる十四万四千人の誕生を表し、第二の復活は、彼女の産みの苦しみの最中に起こる。黙示録12章の女は、まず鉄の杖で諸国を治めるはずの男の子を、産みの苦しみなしに産む。そして日曜法の時に、彼女の産みの苦しみが始まり、第二の子を産む。最初に彼女はエリヤを産み、最後にモーセを産む。日曜法は、黙示録7章の双子が復活する時である。

日曜法の時に第七の封印が完全に開かれると、天では半時間の沈黙がある。

しかし、神は御子と共に苦しめられた。天使たちは救い主の苦悶を目の当たりにした。彼らは、自らの主がサタンの軍勢の大群に包囲され、その御性質が戦慄させる神秘的な恐怖に押し沈められているのを見た。天には沈黙があった。豎琴に触れる者は誰もいなかった。もし人間が、天使たちが無言の悲しみのうちに、愛する御子から御自身の光と愛と栄光の輝きをお分かちになる父なる神を見守り、その驚愕に打たれていたさまを見ることができたなら、罪が神の御目にはいかに忌むべきものであるかを、さらによく理解したであろう。『各時代の希望』 693頁。

地震の一時間のうち最初の三十分は、二人の証人の第一の誕生、すなわち復活を表している。その三十分に、二人の証人は封印される。彼らは日曜法に先立って封印されなければならない。というのも、彼らこそが旗印となって、残りの三十分の間に、もう一人の子を墓から呼び出すからである。第二の子は、日曜法危機の苦難のさなかに、神の封印を持つ男女を見ることによってのみ、生き返ることができる。

聖霊の働きは、世に罪と義と裁きとを悟らせることである。世が警告を受けることができるのは、真理を信じる者たちが真理によって聖められ、崇高で聖なる原則に従って行動し、神の戒めを守る者とそれを足で踏みこむ者との間の境界線を、高尚な意味において示しているのを見ることによってのみである。聖霊による聖化は、神の印を持つ者と、偽りの安息日を守る者との違いを明確にする。試練が来るとき、獣の刻印が何であるかがはっきり示される。それは日曜日を守ることである。真理を聞いた後でもなおこの日を聖なるものと見なし守り続ける者は、時と律法を変えようと考えた罪の人の印を帯びている。聖書訓練学校、1903年12月1日。

女の初子は、ヨハネの黙示録で初穂とされている十四万四千人である。彼らは、日曜法の戦いにおける危機と闘争の中で、他の群れが認識すべきしるしを表している。そのしるしとは安息日であり、それを守ることが違法とされる時にも、十四万四千人はそれを堅く守るのである。ホワイト姉妹は、彼らの旗印を「インマヌエル王子の血染めの旗印」と呼んでいる。

「幻の中で、私は二つの軍勢が恐るべき争いをしているのを見た。一方の軍勢は世界の徽章を掲げた軍旗のもとに率いられ、もう一方はインマヌエル王子の血に染まった軍旗に率いられていた。主の軍勢からは中隊が次々と敵に加わり、また敵の隊列からは部族が次々と神の戒めを守る民に合流していくにつれ、軍旗は一つまた一つと塵に引きずられたままにされた。天のただ中を飛ぶ一人の天使がインマヌエルの軍旗を多くの者の手に渡し、その間、力ある将軍が大声で叫んだ。『整列せよ。今、神の戒めとキリストの証しに忠実な者は、それぞれ自分の持ち場に就け。彼らの中から出て、分かたれよ。汚れたものに触れるな。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、あなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる。心ある者はみな、主を助けるために、強き者に対する主を助けるために、上って来よ。』」

『Testimonies』 第8巻、41頁。

血で染められた旗印は、日曜法の危機の時に、神のもう一つの群れが見なければならないものである。その旗印は、十四万四千人が携える、昇りゆく光である。その旗印は赤い。血染めの旗だからである。その旗印はエリコの戦いにおいて象徴的に示されていた。ラハブが斥候たちを受け入れて守り、その後、窓から緋の糸を垂らすことでヨシュアの軍へ

の服従を表明した時である。ラハブは、日曜法の危機における神の第二の子らを表しており、彼らはその緋のしるしを見て受け入れ、ヨシユアの軍に従うようになる。ラハブが用いたその緋の糸は、ヨシユアの軍がラハブの家を滅ぼさないためのしるしであった。

ラハブは、日曜法の危機においてなおバビロンにとどまっている者たちを表しており、ヨシユアの軍勢は十四万四千人の長子を表している。緋のひもは神の安息日の象徴である。緋のひもを掲げることは、神の守りを得たいのなら従わなければならない、と斥候たちがラハブに与えた命令であった。

見よ、わたしたちがこの地に入るとき、あなたは、あなたがわたしたちを降ろしたその窓に、この緋色のひもを結びなさい。また、あなたの父と母、兄弟たち、そしてあなたの父の家の者すべてを、あなたの家に連れて来なさい。ヨシユア記 2:8。

なおバビロンにいる人々が見るべきしるしは、緋のひもに象徴されており、それは安息日であると同時に、双子の二人を区別するものでもある。双子のうちの長子は十四万四千人である。彼らはインマヌエルの君の血染めの旗印を手に掲げているからである。

彼は諸国民のために旗を掲げ、イスラエルの追い散らされた者たちを集め、地の四隅からユダの散らされた者たちを呼び集める。また、エフライムのねたみは去り、ユダを悩ます者は断たれる。エフライムはユダをねたまず、ユダはエフライムを悩ませない。彼らは西の方、ペリシテ人の肩に飛びかかり、共に東の者どもをかすめ取り、エドムとモアブに手を伸ばし、アンモンの子らは彼らに服従する。イザヤ書 11:12-14。

双子のうち先に生まれたほうには緋の印があり、それは長子であることを示す緋の糸である。先に生まれたのはZarahで、後に生まれたのはPharezである。

そして、彼女の出産の時になると、なんと、その胎には双子がいた。彼女が産みの苦しみをしているとき、一人が手を差し出したので、産婆はその手を取り、「これは先に出た」と言って、その手に緋の糸を結びつけた。ところが、その子が手を引っ込めると、見よ、その兄弟が出てきた。すると彼女は言った、「どうしてお前は破って出てきたのか。この裂け目はお前のものだ。」それゆえ、その名はペレツと呼ばれた。その後、手に緋の糸を巻かれていた兄弟が出てきて、その名はゼラフと呼ばれた。創世記38章27-30節。

Zarah は昇る光を意味し、Pharez は突き破ることを意味する。双子の Pharez は、双子の兄弟 Zarah の手にある緋色の糸の印の昇る光を見ると、「突き破り」、すなわちバビロンから出てくる。Zarah が緋色の糸の昇る光を認めることは、後に生まれたほうの双子が先に生まれたほうの双子に服従することを示している。

そして、人々は東からも西からも、北からも南からも来て、神の国で席に着くであろう。見よ、後の者が先になり、先の者が後になる者もいる。ルカによる福音書 13:29、30。

七つの雷の隠された歴史は三つの道しるべを示している。最初と最後の道しるべは失望の出来事である。最初の失望と真夜中の叫びのメッセージとの間の期間は待機期間である。第二の道しるべである真夜中の叫び以降の期間は封印の期間である。その封印の期間は最後の失望で終わる。

七つの雷の隠された歴史は三つの道しるべを示している。第一と最後の道しるべは、地震の際に墓が開くことである。最初の墓が開くことから「真夜中の叫び」のメッセージまでの期間は、待機期間である。第二の道しるべである「真夜中の叫び」以降の期間は、封印の時となる。封印の時は、最後の墓が開くときに終わる。

七つの雷の隠された歴史の三つの段階についてのこの二人の証人は、キリストの死と復活によっても証しされている。墓が最初に開かれたことは、キリストの水の墓へのバプテスマによって象徴され、最後の墓は十字架であった。キリストのバプテスマと十字架の間に、キリストはご自身のメッセージを宣べ伝え、それは真夜中の叫びを予表していた。彼はその宣言を一千二百六十日のうちに成し遂げた。十字架の後、彼の弟子たちにおいて、真夜中の叫びのメッセージはステパノの死に至るまで一千二百六十日のあいだ繰り返された。

黙示録11章の二人の証人は、千二百六十日のあいだ、真夜中の叫びのメッセージを伝える力を与えられていた。その後、彼らは殺され、よみがえらされて力を与えられるまでの千二百六十日のあいだ、街路に放置されていた。

次回の記事で、これらの真実を引き続き検証していきます。

魂が真に神に立ち帰るのでなければ、神のいのちの息がその魂を霊的ないのちに生かすのでなければ、真理を公言する者たちが天来の原則に動かされるのでなければ、彼らは永遠に生きてとどまる朽ちることのない種から生まれた者ではない。彼らがキリストの義を唯一の拠りどころとして信頼せず、その品性を見習い、その霊にあって労しないなら、彼らは裸であり、彼の義の衣をまとっていない。死んだ者が生きている者として見なされることはしばしばある。というのも、自分の考えに従って自分たちの言う「救い」を成し遂げようとしている者たちのうちには、神が御心のままに志させ、行わせるために働いておられないからである。

「この種の人々は、エゼキエルが幻の中で見た干からびた骨の谷によってよく象徴されている。」 Review and Herald、1893年1月17日。